

成蹊小学校における「自由研究」の取り組みに関する研究

神野正喜*

(2015年11月13日 受理)

A Study on “Free Study (Jiyu-Kenkyu)” at Seikei Elementary School

Masaki JINNO*

1. はじめに

昭和22年3月に刊行された「学習指導要領 一般編（試案）」の特色の一つは、小学校において、社会科、家庭科とともに教科「自由研究」が新設されたことである。新教科の一つとして設置された「自由研究」ではあったが、昭和26年改訂版「学習指導要領 一般編（試案）」では廃止されて、その教科名はなくなり、新たに教科以外の活動の時間が設けられている。すなわち、それは、「(a) 民主的組織のもとに、学校全体の児童が学校の経営や活動に協力参加する活動」としての「(i) 児童会、(ii) 児童の種々な委員会、(iii) 児童集会、(iv) 奉仕活動」であり、「(b) 学級を単位としての活動」としての「(i) 学級会、(ii) いろいろな委員会、(iii) クラブ活動」である。

本稿は、新設教科がわずか4年間でなくなるという希少な例になってしまった「自由研究」について、具体的にはどのような取り組みがなされていたのかを、成蹊小学校での実践を引きながら、明らかにしようとするものである。

2. 新設教科「自由研究」

昭和22年版「学習指導要領 一般編（試案）」の「第三章 教科課程」には、「われわれは、前に教育の根本目的をもとにして、社会の要求を考え、そこから教育目標をどこにおくべきかを考えた。この教育の目標に達するためには、多面的な内容をもった指導がなされなくてはならない。この内容をその性質によって分類し、それで幾つかのまとまりを作ったものが教科である。」¹⁾として、9つの教科名(国語、社会、算数、理科、音楽、図画工作、家庭、体育、自由研究)が挙げられている。こ

に、戦後の新しい教科として、社会科、家庭科、自由研究が設けられることになった。

「昭和22年版学習指導要領 一般編（試案）」には、配当時数を示した教科表が掲載されているが、それによると、「自由研究」は、4学年以上に位置づけられている。週あたりの授業時間は2～4時間であり、年間では70～140時間が配当されている。つまり、週4時間実施すれば、年間で最大140時間の「自由研究」の時間を取ることができる。しかし、実際には、他の教科との兼ね合いもあって、週2時間扱いの実施が多かったようである。次頁の表では、() 付の数字が週配当時間を表している。

(1) 「自由研究」設置のねらい

全く同じではないものの、戦前の修身・公民・地理・歴史の教科内容を引き継いでいる社会科や、家事科と関連のある家庭科とは違って、「自由研究」には前身の教科はなく、全く新しく設けられた。そのために、昭和22年版「学習指導要領 一般編（試案）」でも、「新しい教科課程で、はじめてとりあげたものであるが、この時間を、どんなふうに着用して行くかについては、少しく説明を要するかと思う」と述べて、それを説くことに多くのスペースを割いている。

(前略) 教科の学習は、いずれも児童の自発的な活動を誘って、これによって学習がすすめられるようにして行くことを求めている。そういう場合に、児童の個性によっては、その活動が次の活動を生んで、一定の学習時間では、その活動の要求を満足させることができないようになる場合が出て来るだろう。たとえば、音楽で器楽を学んだ児童が、もっと器楽を深くやってみたいと要求するようなことが起るのがそれである。こういう時には、もちろん、児童は家庭に帰ってその活動を営むことにもなろうし、また、学校で放課後にその活動を営むことにもなろう。

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

表1 小学校教科表

学年 教科	1	2	3	4	5	6
国語	175 (5)	210 (6)	210 (6)	245 (7)	210-245 (6-7)	210-280 (6-8)
社会	140 (4)	140 (4)	175 (5)	175 (5)	175-219 (5-6)	175-210 (5-6)
算数	105 (3)	140 (4)	140 (4)	140-175 (4-5)	140-175 (4-5)	140-175 (4-5)
理科	70 (2)	70 (2)	70 (2)	105 (3)	105-140 (3-4)	105-140 (3-4)
音楽	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70-105 (2-3)	70-105 (2-3)	70-105 (2-3)
図画工作	105 (3)	105 (3)	105 (3)	70-105 (2-3)	70 (2)	70 (2)
家庭					105 (3)	105 (3)
体育	105 (3)	105 (3)	105 (3)	105 (3)	105 (3)	105 (3)
自由研究				70-140 (2-4)	70-140 (2-4)	70-140 (2-4)
総時間	770 (22)	840 (24)	875 (25)	980-1050 (28-30)	1050-1190 (30-34)	1050-1190 (30-34)

出典：昭和22年版学習指導要領 一般編（試案）²⁾

しかし、そのような場合に、児童がひとりでその活動によって学んで行くことが、なんのさしさわりがないばかりか、その方が学習の進められるのにも適当だということもあろうが、時としては、活動の誘導、すなわち、指導が必要な場合もあろう。このような場合に、何かの時間において、児童の活動をのばし、学習を深く進めることが望ましいのである。ここに、自由研究の時間のおかれる理由がある³⁾。

「自由研究」は、「何かの時間において、児童の活動をのばし、学習を深く進めることが望ましいのである」が、その「何かの時間」として設置されたのである。つまり、児童が教科学習における発展的な課題を自主的、自発的に設定し、それを継続的に追究し解決する時間として位置づけられたのである。

(2) 「自由研究」の活動形態

「どの児童も同じことを学ぶ時間として、この時間を用いて行くことは避けたい。」⁴⁾と述べられているように、「自由研究」は学習活動の多様性に特徴があるので、教科学習のような一斉指導を想定していない。その活動形態は、同好の児童によって組織するクラブ活動を例にして、次のように述べられている。

こうして、児童青年の個性を、その赴くところに従って、のばして行こうというのであるから、そこには、さまざまな方向が考えられる。ある児童は工作に、ある児童は理科の実験に、ある児童は書道に、ある児童は絵画にというふうに、きわめて多様な活動がこの時間にいとなまれるようになろう。

このような場合に、児童が学年の区別を去って、

同好のものが集まって、教師の指導とともに、上級生の指導もなされ、いっしょになって、その学習を進める組織、すなわち、クラブ組織をとって、この活動のために、自由研究の時間を使って行くことも望ましいことである。たとえば、音楽クラブ、書道クラブ、手芸クラブ、あるいはスポーツ・クラブといった組織による活動がそれである⁵⁾。

また、「このような用い方は、要するに、児童や青年の自発的な活動のなされる余裕の時間として、個性の伸長に資し、教科の時間内では伸ばしがたい活動のために」⁶⁾用いるのであって、「児童が学校や学級の全体に対して負っている責任を果たす—たとえば、当番の仕事をするとか、学級の委員としての仕事をするとか—ために、この時間をあてることも、その用い方の一つといえる。」⁷⁾と述べられており、当番活動や委員会活動のような形態での活動も考えられている。ここから、教科の位置づけながら、「自由研究」は柔軟な発想のもと、設定されていることが分かる。

以上をまとめると、「自由研究」は、次に挙げる3つを主な活動内容として設置されたのである。

- (1) 個人の興味と能力に応じた教科の発展としての自由な学習
- (2) クラブ組織による活動
- (3) 当番の仕事や、学級要員としての仕事⁸⁾

3. 成蹊小学校の取り組み

では、この「自由研究」は、学校の現場では、どのように実践されたのであろうか。私立学校である成蹊小学

校の例を見てみよう。

成蹊小学校は、昭和22年5月25日に、成蹊小学校教育研究所編「生活教育研究」第1集（自由研究と社会科の指導）を発行している。

当時、成蹊小学校長・成蹊高等学校長であった清水護が同書の「創刊のことば」において、「本校は、大正三年創立以来、人間性の開発をめざした個性の尊重と、次代の国家社会の成員として高邁なる社会人たる品性の陶冶とを、伝統的教育理念として、こゝに教育力を結集しつゝ、今日におよんでいるのである。この目標を達成すべく、児童の现实生活に根ざしつゝ、自発的精神をかん養し、自他の敬愛と協力による社会性の陶冶を期する生活教育の建設に努力しつゝある。この建設過程における、本校職員の研究活動の記録を、研究紀要の形態にまとめて、この季刊『生活教育研究』の誕生となつたのである。」⁹⁾と記しているように、同書は、学校としての研究成果を発表することを目的とした研究紀要の性格をもって刊行されている。

昭和22年版「学習指導要領 一般編（試案）」において、小学校では、戦前の既存教科である修身、地理、国史が廃止されて、社会科が新設されている。第1集の特集を「自由研究と社会科の指導」としたのは、時宜を得たものであった。

ここでは、成蹊小学校教育研究所編「生活教育研究」第1集を主な資料として、成蹊小学校における「自由研究」の取り組みがどのようなものであったのかを概観してみる。同書には、当時、成蹊小学校主事であった滑川道夫が「生活教育における自由研究と社会科」という一文を寄せている。以下の引用は、それに拠っている。

滑川道夫は、昭和32年10月2日に開所した成蹊学園教育研究所の初代所長に就任しているが、当時は、昭和21年4月に主事に就いたばかりであった。しかし、後に、「昭和二十一年、成蹊小学校主事に滑川道夫が就任するや、小学校は沈滞から脱し、活気を取り戻し、民主的新教育の線を力強く打出した。」¹⁰⁾「成蹊小学校は、戦争の打撃からいち早く立ち直り、創立精神の基盤の上に乗って民主主義的要素をとり入れ、特色ある名門私立小学校としての地位を取戻した。戦後の財政的危機の中にあつて、よく時世を捉え、新しい教育理想のもとに、成蹊小学校の名声を再興した功労者は滑川道夫主事であったといえよう。」¹¹⁾と評価されているように、当時、滑川道夫は、学校運営や研究活動において、その手腕を遺憾なく振るっている。

『日本作文綴方教育史』既刊3巻、『桃太郎像の変容』『日本児童文学の軌跡』等の大著に代表されるように、国

語教育、児童文学、児童文化の研究者、国語教育（文章表現指導、読書指導）の実践者としての業績が顕著である滑川道夫が学校経営の才能も秀でていたことを窺い知ることができる。

（1）成蹊小学校における「自由研究」の位置づけ

前述のように、新設教科「自由研究」は、昭和22年版「学習指導要領 一般編（試案）」においては、児童が教科学習における発展的な課題を自主的、自発的に設定し、それを継続的に追究し解決する時間として設けられている。

ところが、成蹊小学校では、そのねらいや実施形態等がほぼ同じであるにもかかわらず、「自由研究」は教科外学習として位置づけられている。そのあたりの事情を、滑川道夫は、次のように述べている。

一九四六年四月、まだ国民学校時代の教科課程に據らなければならなかつたころ、教科外の指導として、

- 1, 自由研究指導（児童の自発的自由な研究）
- 2, 生活指導（児童の生活自治組織の運営）
- 3, クラブ指導（子どものクラブ活動の指導）

の三つを頭にえがいた。

社会科が誕生する以前のことであるから、社会科の活動をも、この自由研究の構想の中にくくめて、「文化学習」と呼んで出発した¹²⁾。

また、成蹊小学校教育研究所編「生活教育研究」第1集には、「自由研究と社会科の指導」と題する座談会が記録されている。成蹊小学校の教員10名（うち、発言者は8名）が出席した座談会であるが、その冒頭で滑川道夫が、次のように発言している。

（前略）自由研究は昨年四月から「文化学習」として、教科外に実施してきましたが、そのころは、社会科というものの存在の見とおしがつかなかつたので、自由研究という考え方から、教科外の学習指導をすすめてまいりました。子どもの自発的研究活動を教科外指導の立場から研究をすゝめようとししました。しかも教科外学習と教科学習とを対立的にみないで、止揚し教場で生活学習を展開したいと願ってきたのであります。教科外という呼び方をやめて、むしろこれまで教科外と目されているものの中に、ほんとうの学習活動があるのではないかという考え方をとつたわけです¹³⁾。

教科学習と教科外学習の統合を目指すという考えは、次のような言葉にも表れており、「自由研究」を教科外学習の時間として位置づけた意図を理解することができる。

国民学校時代の教科編成は、極論すれば、学問的要素から選びとられた一つの系統的知識および技

術・能力を考慮した（といつても近代産業・職業的観点からの密接な結合はないが）配列にすぎない。したがって、児童の興味・関心を中心とした自由な創造的な学習活動の自然的な発動は、このような教科活動よりも、むしろ、教科外的な分野に生動しているといわざるを得ないものがある。（中略）

そこで、今、問題を「自由研究」に限定すると、自由研究こそ、もつともよく、児童の自発性・活動性・個性・社会性の伸張に適合するものであるという考え方が強まってきたのである¹⁴⁾。

滑川道夫は、教科学習と教科外学習の特性を次のように整理している。

教科学習の特性は

- a. 与えられた教科書を中心とする。
- b. 教材は限定性をもっている。
- c. 教師を主体にする意味において他律的である。
- d. 基礎的な知識・能力・技術を、一定量として学ばせる意図をもっている。
- e. 教材を生活化させる方向をとらざるを得ない。

これに対して教科外学習の特性は、

- a. 児童アクティビティを中心としてみずから求めていく。
- b. 教材は無限定性をおびている。
- c. 児童の興味、関心を主体とした自律的・自発活動が大きくはたらく。
- d. 児童自身の既得の実力の応用・活用の「場」が、ひろがっている。
- e. 生活そのものを下から高めていく方向をたどる¹⁵⁾。

この整理をふまえたうえで、「教科書の一科一科の終了は、学習の完結を意味するのではなく、教科外の学習の展開の『門』と見なければならぬのである。これから展開する学習の『出発』として考えなければならぬ。」¹⁶⁾と述べて、教科学習と教科外学習の連続性を意識している。

以上の経緯を、成蹊小学校記念誌編集委員会編『こみちのあゆみ—創立80周年記念誌—』（平成7年11月20日発行）では、次のように振り返っている。

- 滑川新主事のもと、生活の中における児童自らの学習体系の構成を目的として「文化学習」の指導が始まりました。これは、教科外学習指導の三本柱、
- A 自由研究（児童の自主自発的な自由研究を根幹とするもの）
 - B 生活指導（児童の生活の中の自治組織の運営を目指すもの）
 - C クラブ活動（児童の意志を尊重したクラブ組織に

よる指導を目的としたもの）

の「自由研究」の課程を拡大したもので、文芸部、地歴部、科学部、美術部、工芸部、音楽部、体育部の七部でスタートし、その後の調整で文芸部、社会部、科学部、算数部、美術部、音楽部の六部に統合されました。「社会科」誕生以前のことで、全国にさきがけた先進的な試みでした。児童の活動性を中心とした自学自修の場が得られることや、教材性が大であること、自律・自発の気を培い生活そのものの昂揚を図り得ることなどが重視され、新教育の試みとして高く評価されました。こうして教科学習と教科外学習との統合＝「生活学習」の構想が練られたのです。

翌22年には、「生活教育」の三つの学習形態が明確にされ、

- I 日常生活課程（自治活動、行事教育、図書館学習）
 - II 生活学習（社会、自然における主要な経験領域についての学習指導）
 - III 基礎学習（基礎的技能や基礎的知識の系統的学習）
- の中において、生活学習を中心とする学習計画の組織化が図られました¹⁷⁾。

（2）成蹊小学校の「自由研究」のねらい

滑川道夫は、「自由研究指導の目標」として、次の5つ挙げている。

- ①児童自身の生活から取材する自由な、自発的な研究を奨励し、既得の「力」を活用させる研究行動によつて、生活建設をはかる児童の自発的学習活動を、興味と関心をもつ研究生活をとおして育成しようというのが、第一のねらいである。

- ②個別指導による個性の伸張。

自由研究の指導をとおして、児童に新たな個性を発見し、助長し、特性とする長所を十分に伸ばそうとする。

- ③協同学習による社会性の陶冶。

選材された研究取材の同一性・類似性を基調として、共同研究、もしくは、研究グループを組成して、「協力」をとおして社会性の陶冶を期す。

- ④研究記録および研究報告の児童自身の創造する児童文化の建設を意図する。

研究はつねに形象化され、その過程が記録されつゝ集結され、発表されなければならない。そこに研究活動は表現活動によつて支持されることになる。それがとりもなおさず生産的な児童文化として観られなければならない。

⑤新たな教科課程の建設・教科書改編への研究を意図する。

この指導を通して、カリキュラム適不適の検討し研究し、同時に教科書の在り方・性格を吟味して、次の改編、あるいは独自の編集への基礎たらしめたいのである。この意図は、教科学習と教科外学習との一致の理想をめざして永続性をもっているものである¹⁸⁾。

これをまとめると、次のようになる。

- ①自発的学習活動の育成
- ②個別指導による個性の伸張
- ③協同学習による社会性の陶冶
- ④児童自身の創造する児童文化の建設
- ⑤教科課程の建設・教科書改編への研究

同じ時期に、広島高等師範学校附属小学校で実施された「自由研究」のねらいとして、4点（一 個人的自由性の助長、二 個性の助長、三 自学態度の助長、四 社会共同性の助長¹⁹⁾）が挙げられており、共通する部分がある。

また、東京高等師範学校附属小学校における「自由研究」について、佐藤保太郎（東京高等師範学校附属小学校校長）は、期待できる成果として、次の7点を挙げているが、やはり、成蹊小学校が掲げるねらいと共通する部分がある。

第一に、自由研究は児童の個性伸張をねらっていることである。（中略）

第二に、自由にのびのびと研究が出来ることである。（中略）

第三に、（中略）自由科に於ては、自主的態度が推奨され、すべて自発的、積極的に行動することゝなる。（中略）

第四に、古い教育では、（中略）全く受動的で、思考力や判断力を練る機会に恵まれなかつたが、自由科は行動的で、自ら研究を計画し、工夫し、努力する。そして失敗と修正と成功を重ねて行くうちに、具体的な知識と技能を会得し、創造力を養うことが出来る。

第五に、（中略）とにかく自分の求めた問題を研究して一応まとめ、仕事の計画から終結までの経験を積むところに重要な意味がある。

第六、したがって、自由研究は目標を指して研究を継続することである。（中略）これは人格の養成上特に大切な点である。

第七に、（中略）互に協力して共同の目的を達成するところに善良な社会性を養うことが出来る²⁰⁾。

このように比べてみると、教科外学習として実施され

た成蹊小学校の「自由研究」のねらいが、新設教科として実施された「自由研究」（広島高等師範学校附属小学校、東京高等師範学校附属小学校の例）のそれと大きな違いはないことが分かる。

（3）成蹊小学校の「自由研究」の実施

1）実施学年

滑川道夫が、「四年以上とする。知能の発達程度から見て、四年生以上とした。それ以外の意味はない。この期間のみ学級を解体して、後で述べる部属の集団に編入される。したがって、所属したグループには、四年生・五年生・六年生がまじっているわけである。」²¹⁾と述べているように、昭和22年版「学習指導要領 一般編（試案）」の教科表と同じく、4・5・6学年に位置づけている。

これは、研究課題の決定、研究計画の立案等の学習活動を考慮すれば、当然のことであると考えられる。

三つの学年から成る縦割り集団を形成して活動するのは、クラブ活動と同じである。

2）授業時間

「最初の構想は、毎日午後の時間をあてるつもりであつたが、（中略）現在は、一週二日、午後二時間づゝこれにあてている。（水曜の午後二時間は生活自治の時間とし、木曜の午後二時間は、体育・美術・音楽のいずれかの全体学習にあてられている。）²²⁾とあるように、週配当時間の最大限4時間を活動時間としている。教科としての「自由研究」を週2時間配当で授業を実施している学校が多い中、成蹊小学校では、「自由研究」に力点をおいて教育活動を行っていた証左になろう。

3）活動場所

活動場所としては、校外、教室、特別教室（理科・工作・音楽）講堂・児童図書館が挙げられている。

4）活動組織

児童が所属する活動組織について、次のように述べられている。

出発に際してとつた部属は、

- （一）文芸部（児童文学・新聞研究・校内新聞編集・紙芝居・幻燈のシナリオ作成等）
- （二）地歴部（地理・歴史・社会・郷土）
- （三）科学部（理科研究・算数研究）
- （四）美術部
- （五）工芸部（工作・手芸）
- （六）音楽部
- （七）体育部

というその当時の教科的な構成で、児童の研究の希望によつて自由に選択入部させたのであつた。（中略）希望者が多数を占めた科学部を二つに分け、科学部

と算数部とを独立させ体育部を特殊な研究者のグループにせず、美術音楽とも一日をさき、全児童のものにするために、この部類から除くことにした。その他、実践的な反省による修正として、(途中の変移があつたが省略する)結局、地歴部を、「社会」として、文芸部に所属していた「新聞研究」をこれに所属させ、美術部を工芸部の中に編入させ、結局、つぎのような部属におちついてきた²³⁾。

当初、七つの部で始まった活動組織が、文芸部、社会部、科学部、算数部、美術部、音楽部という六つに整理されている。

5) 指導者

児童の研究課題が、教科の学習内容に関連することが多いので、その指導については、各教科の訓導(教師)がその任に当たっている。

(4) 成蹊小学校の「自由研究」の展開

それぞれの組織において、児童の研究活動が進められているが、その大まかな流れは共通している。

①研究主題の決定(取材の指導)

まずは、個々の研究主題が決められる。その指導には、「もっともよく、児童の生活を知っているから、研究主題の適切な指導ができる立ち場にある」という理由から、学級担任があたっている。主題決定は自由に行うが、次のように、一応の観点は設けられている。

- (イ) 児童の生活的見地—できるだけ児童の身近な題材を選ばせるようにして、心意発達の程度に適切かどうか、現有の基礎的知識・能力・技術から離れすぎているかどうか吟味してやるのである。
- (ロ) 社会的見地—人間と社会との交渉、社会的施設や機能、国家的機関等の理解と将来の社会的必要性から選材を指導する。
- (ハ) 文化的見地—人類の文化創造の偉業、発明発見等の文化環境に対せしめ、児童生活に関係の深いもの、興味と関心の強いものから選材するようにする²⁴⁾。

しかし、実際には、後述するように、児童の実態に合わない主題が選ばれる等の困難点があったようである。

「①研究主題の決定」の後、次のように、展開している。

- ②決定された研究題目の性質によつて、前述の部属に編入する。
- ③部担任の指導者は、編入された児童の研究主題を児童とともに検討して研究目標と達成への手順について話し合いをする。
- ④そこで個別指導のほかに、共通する研究主題をも

つ児童をして共同研究のグループを組織することもある。

- ⑤研究資料を集める作業が始まる。参考図書、写真、施設見学個所等の在り場所、見学の計画等を必要に応じて作る。
- ⑥研究完了の予定期間を定める。
- ⑦研究活動にはいる。児童図書館・学園図書館理科室その他特別施設、校外の社会施設等の活用をはかる。
- ⑧研究のゆきずまり、疑問を教師に持つていつて示唆を與えてもらう。教師は随時、研究を補導する。
- ⑨研究の進行過程を、進行表に記入する。(児童および教師)
- ⑩研究成果は、絶えず記録され、作品とともに保存する。
- ⑪完了した研究は、口頭か文章表現によつて発表される。あるいは、回覧の形をとる時もある。
- ⑫定期および随時に、全校発表会、各部発表会をもつ。
- ⑬各部の指導者は各自の研究進行状態を記録して指導の充実を期するように努める²⁵⁾。

(5) 成蹊小学校の「自由研究」の実際

では、成蹊小学校において、「自由研究」がどのように実施されたのかを、文芸部での実践を引例しながら、具体的にみてみよう。

1) 文芸部のねらい

文芸部のねらいは、「自由研究」の学校全体のねらいをふまえて、「児童の自発的意志と興味に基づいた研究により、文化価値の正しい理解と、芸術精神の体得をさせ、それによつて児童の個性伸張と人間性の開発に資することにおいた。」²⁶⁾と述べられている。

学校全体のねらいをふまえた点については、「各自の自由意志によつて、文芸部に参加して来た児童に、何を体得させるかということについてである。個性にもとづいた自発的な研究活動による真理の探究、人間性の開発、自己更新、研究態度の養成という自由研究のねらいを実現させながら、特に文芸部という範囲及び文化財の限定から、文化価値の体得、更にいえば、芸術精神に触れさせるところに、力点を置いた」²⁷⁾と述べている。

2) 文芸部の組織

児童の自由意志によつて文芸部に参加した児童は23名(4年生:男子6名・女子4名, 5年生:男子4名・女子3名, 6年生:男子6名・女子0名)であった。それぞれの研究題目は違うことと、担当教師が2人いることから、2つの班(劇と童話の班、詩・和歌・俳句・紙芝居その他の班)に分けて研究活動が進められている。

3) 児童が選んだ研究題目

研究題目は、児童が自らの興味・関心に基づいて、主体的に選んでいるが、「研究題目としては、あまりに大きすぎるもの、漠然としているもの、現在の能力から判定して無理なもの、努力の割合に価値のないもの等」²⁸⁾については、児童の意志を尊重しながら、教師が相談の時間を設けている。その結果、決まった研究題目は、次のようである。

○白秋の詩について	四年児童
○私の好きな外国の詩	〃
○通学の紙芝居づくり	〃
○俳句の季題について	〃
○ローマ字で書いた詩の研究	〃
○辞書のひき方について	〃
○ぼくの歌集	〃
○私の自由詩	〃
○一茶の研究について（後に一茶と良寛の比較研究に発展す）	五年児童
○ぼくにわかる芭蕉の俳句	〃
○少年四季の和歌	〃
○学校生活をうたう詩	〃
○読むとはどんなことか	〃
○同級生の姓名と常用漢字	六年児童
○字源の研究	〃
○手紙の研究	〃
○国語読本を新かなづかいで書くこと	〃
○加賀千代の研究	〃
○アンデルセンの研究	〃
○私の詩集	〃 ²⁹⁾

これら以外にも劇や童話に関する研究題目がある。児童の自由意志を大切にすることもあって、途中で題目の変更を申し出た児童もいたようである。

4) 文芸部の成果

個々の児童の研究成果の他にも、期せずして、次のような点により傾向があったとして、5点が挙げられている。

- (1) 鑑賞力が高まったこと
- (2) 創作欲が旺盛になったこと
- (3) 上級生下級生の助け合いがなされたこと
- (4) 研究上困れば、自然に相談会が開かれたこと
- (5) 参考物の使い方と整理がよくできるようになったこと

なお、個人の研究成果については、発表をもって公にされている。

(6) 成蹊小学校の「自由研究」実施上の困難点

前述の「自由研究と社会科の指導」と題する座談会では、「自由研究」の反省として、次のような指導上の困難点が指摘されている。

滑川 資料とか参考書とか設備とかみな大きな問題ですね。

飛田（前略）はたして子どもたちが本当に適当な問題をえらんでいるかということが一つ（後略）

村上（前略）参考書や研究資料が不足していることは社会部でも感じている。（中略）中には題目のえらび方が適切でなかつたためとか、研究の資料が不足したために一学期間つづけてもあまり進歩しなかつたものもあります。こういう子どもの題目の指導なり研究施設をだんだん整備していくということが、われわれの反省すべき問題だと思います。

飛田 今の社会部の反省の中にあつたことは文芸部でも同じで、研究問題のえらび方、研究時間のもんだい、設備のもんだいこれは他の部でも同じような反省があると思いますが、いかがですか。

加藤 美術部の方でも同感です。

香取 算数部の方でも同様です。児童が選んだ研究題目が児童の研究能力に適合しているかどうかは、指導者がよく検討して、適切な指導をしなければなりませんね。それから算数の自由研究を実施して、一番困つたのは設備の不完全なことです。（後略）

土方 今までに共通な問題として、設備、題目、時間がとりあげられましたが、科学部でもこれを痛切に感じていました。（後略）³⁰⁾

「自由研究」の指導を行ううえでの困難点として挙げられているのは、次の3点である。

①研究問題の選び方

児童各自に適切な研究問題を選ばせることの難しさ

②研究時間の問題

児童の多くは、より多くの時間を費やして自由研究を進めたいという希望をもっているが、教育課程上、それが難しいこと

③設備の問題

図書・活動場所・設備・備品について言えば、児童の要求に応える（児童が必要とする）ほどには十分ではないこと

これらについては、他の学校においても同様のことが指摘されている^{注1)}。

4. おわりに

以上、概観したように、成蹊小学校における「自由研究」は、昭和22年版「学習指導要領 一般編（試案）」とは違って教科外学習としての位置づけであった。しかし、そのねらい、運営組織、児童組織、実施計画等においては、「自由研究」を教科として位置づけた学校と大きな差異のない活動が行われていた。

むしろ、教科外学習という位置づけのほうが無理を感じさせないが、実施上の困難点が、他校と同じように、「自由研究」廃止の原因の一つになったのであろう、と推測されるのである。

ただ、教科学習と教科外学習の連続性を重視する考え方や、「自由研究」の運営方法には、今も学ぶべき点は多々ある。

注

- 1) 例えば、広島高等師範学校附属小学校の藤井要が、「自由研究を憶う」（『学校教育』第388号、1950）という一文のなかで、自由研究の運営上の問題として、○児童が設定する研究課題、○運営組織の問題、○教育環境（施設・設備）の3点を挙げている。この点は、成蹊小学校、広島高等師範学校附属小学校に限らず、多くの学校で解決すべき課題になっていた。

引用文献

- 1) 文部科学省 2013 昭和22年版「学習指導要領 一般編（試案）」別冊初等教育資料900号記念増刊「教育の未来を拓く学習指導要領の変遷」東洋館出版社、p. 27
- 2) 前掲書1) p. 28
- 3) 前掲書1) p. 28
- 4) 前掲書1) p. 28
- 5) 前掲書1) pp. 28-29
- 6) 前掲書1) p. 29
- 7) 前掲書1) p. 29
- 8) 前掲書1) p. 57
- 9) 成蹊小学校教育研究所編 1947 「生活教育研究」第1集（自由研究と社会科の指導）、p. 1
- 10) 成蹊学園史刊行会編 1973 成蹊学園六十年史 成蹊学

- 園、p. 512
- 11) 前掲書10) pp. 517-518
- 12) 前掲書9) pp. 23-24
- 13) 前掲書9) p. 161
- 14) 前掲書9) p. 24
- 15) 前掲書9) p. 25
- 16) 前掲書9) p. 25
- 17) 成蹊小学校記念誌編纂委員会編 1995 こみちのあゆみ—創立80周年記念誌—、p. 47
- 18) 滑川道夫 1947 自由研究指導の在り方 成蹊小学校教育研究所編「生活教育研究」第1集、p. 26
- 19) 広島高等師範学校附属小学校学校教育研究会 1948 自由研究の方向と実践 宝文館、pp. 5-12
- 20) 佐藤保太郎 1947 自由研究について 東京高等師範学校初等教育研究会編「教育研究」17（自由研究特集号）、pp. 2-3
- 21) 前掲書9) p. 27
- 22) 前掲書9) p. 27
- 23) 前掲書9) pp. 27-28
- 24) 前掲書9) p. 29
- 25) 前掲書9) pp. 29-30
- 26) 前掲書9) p. 32
- 27) 前掲書9) p. 33
- 28) 前掲書9) p. 35
- 29) 前掲書9) p. 36
- 30) 前掲書9) pp. 162-163

参考文献

- 成蹊小学校教育研究所編「生活教育研究」第1集（自由研究と社会科の指導）昭和22年5月25日発行
- 東京高等師範学校初等教育研究会編「教育研究」第17号（自由研究特集号）昭和22年11月1日発行
- 山本隆大・野田敦敬 2012.3 昭和22年度学習指導要領（試案）教科「自由研究」から見る探究活動の課題について 愛知教育大学研究報告・教育科学編61輯
- 成蹊小学校記念誌編纂委員会編『こみちのあゆみ—創立80周年記念誌—』平成7年11月20日発行
- 成蹊学園編『成蹊学園六十年史—』昭和48年3月31日発行
- 海老原治善『民主教育実践史 新版』三省堂、1977年10月30日発行